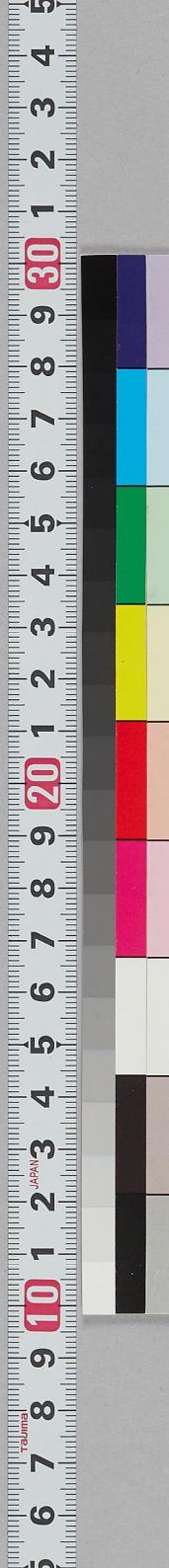
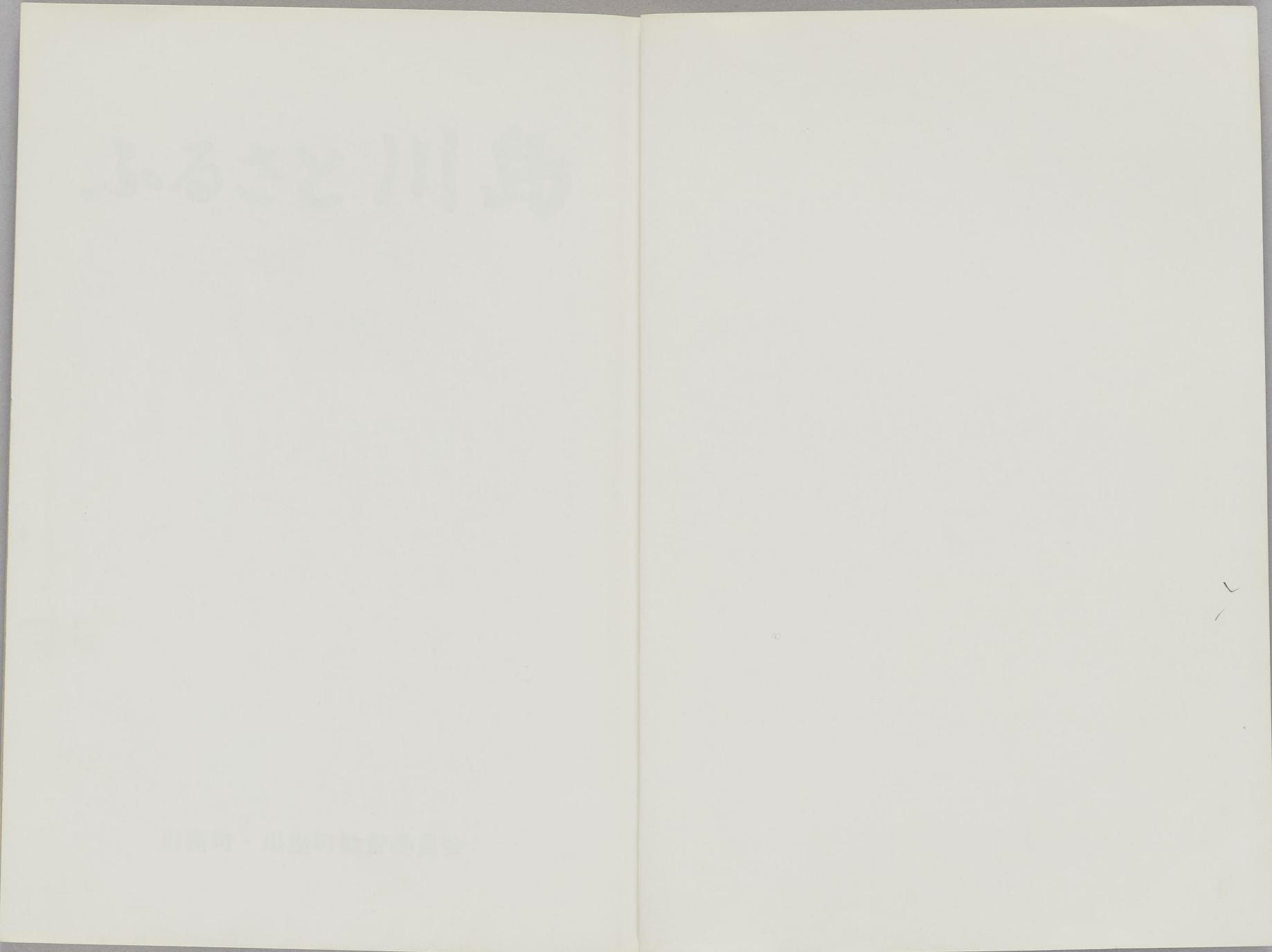


# ふるさと 川島





# ふるさと川島

川島町・川島町教育委員会



川島古城山出土の銅鐸

## 「ふるさと川島」発刊によせて

川島町長 須 藤 利 明

「ふるさとは遠きにありて思うもの……」とか申されますが、故郷を離れ遠くに住む私の同級生から、「年と共に生れ育つた川島は実に懐かしく、また誇りとさえ思える。どこに住んでも川島に生れ川島に育つた事に有難さを覚える」と聞かされ、まったく同感と思うようになりました。

私たちは、住みなれたわが町を、ともすると今の豊かな暮らしに馴れてしまって、美しい故郷の山や川、あたたかい人情や歴史、文化遺産を、忘れかけているのではないか。

このたび、町文化財保護審議会の方々によつて、道ばたの古い石像や、板碑、神社やお寺の建物等が、ややもすれば忘れられたり、貴重な資料が散らばつたり、失なわれてしまうことを心配して、町内にある文化財を再確認すると共に、それらを町の歴史の流れの中に位置づけて、それぞれの文化財の意義を思い出していくこととで、本書が刊行される事となりました。

本書によつて、町の歴史と文化財に深い理解と関心が高まり、郷土を愛する心がより深まることを期待しています。

終りに、本書発行にご尽力いただいた皆様方の御労苦に敬意と感謝を捧げます。

珍り、本費を省き原はなづかき書類式の圖を苦心經營して編集を終ります。

一言二言で

本書はまことに、田の郷土の文化相の歴史の要領を關心が高まり、郷土を愛する心地より編むものと自負

出たててござる。本書は郷土の歴史の文書の中の貴重な資料として、今後子供の文書類の意義を想起せしめます。貴重な資料を惜む事ござり、失念せば大いに惜しいものと心痛つて、国内外ある

このため、伊文が初版発行費金の貰ひ口をもじり、頃刻古の古文書類、対照、解説等の集録等、

あらわす人間字類史、文書類等、急げやれでござるのとおなじつゝ也。

邊りを以て、泊らるけぬゆ門を、もとぞらうの豊せんへる山に歸らうと躍びあがめたり、或つて是處の山子山、

山の音楽を聞き入るゝの間をもとめ、おもむくへ同郷の想をもててござりあつた。

「早ち其の生れ育ての川島は夫に熟すと、また歸りよると思ふ。」この言葉入るる川島はまことに川島の音

によるその音色をさりて思ひあつた……。かく申あつたまじめ、話題を繰り返しておひそひの同郷生じゆ。

## いざらわいの川島」發刊式はせん

田島田井 諸 蘭 明 博

### はじめに

近年は、自分達が生れ育まれた郷土に対する理解や、関心がうすいといわれます。毎日の生活が单调で、その幅と深みが少くなつたからかも知れません。

郷土を知ることは、郷土を愛することにもつながるものであります。そこで、本町教育委員会では、町民が広く理解し得る郷土読本を、ということでこの企画が進みました。わが川島の自然や文化、歴史や遺物・遺跡、神社や寺院、学校や各種施設、石像や碑文など、眼で見得る素材をいくらか取上げ、写真を通して理解を図ることにしました。

わたし達委員は、部門を分けてそれぞれ執筆に当りましたが、もとより十全とは申し得ません。しかし、町民の皆様が、この小説本を手がかりとして、少しでも本町のあらましをご理解いたければ、編集委員一同何よりと存ずる次第であります。

昭和五十九年三月三十一日

田島田井 諸 蘭 明 博

## 目 次

発刊によせて

はじめに

1 山の神さん	9	14 岩の鼻	20
2 水神の滝	10	15 地蔵さん	21
3 志田宮神社	11	16 麻名用水	22
4 川島の石	12	17 大日寺跡	23
5 八坂神社	13	18 川島高等学校	24
6 川島焼	14	19 大正池	25
7 川島城址	15	20 岡山のミミカキグサ群落	26
8 川島神社	16	21 川島のイワヒトデ群落	27
9 古城山真福寺	17	22 中央美化センター	28
10 町内の巨樹・老木	18	23 川島の峰	29
11 城山の板碑	19	24 上桜城址	30
	20	25 白蓮山妙啓寺	31
	21	26 公民館	32
	22	27 排水機場の碑	33
	23		34
	24		35
	25		
	26		
	27		
	28		
	29		
	30		
	31		
	32		
	33		
	34		
	35		
	36		
	37		
	38		
	39		
	40		
	41		
	42		
	43		
	44		
	45		
	46		
	47		
	48		
	49		
	50		
	51		
	52		
	53		
	54		
	55		
	56		
	57		
	58		
	59		
	60		
	61		
	62		
	63		
	64		

徳島県川島合同庁舎

28 29 29 28

学のぶどう園

44 44 44

お稲荷さん

29 29 29

瑠璃山薬師寺

44 44 44

川島小学校

30 30 30

八幡神社

44 44 44

伊加々志神社

31 31 31

王子神社・西出目の八幡神社

44 44 44

加岳山長樂寺

32 32 32

紫雲山善勝寺

44 44 44

藍作と藍寝床

33 33 33

庚申さん

44 44 44

正倉院の絶

34 34 34

潜水橋と阿波麻植大橋

44 44 44

川島中学校

35 35 35

吉野川河跡の池

44 44 44

町内の古墳

36 36 36

善入寺島

44 44 44

高越神社

37 37 37

町の木カエデ・町の花キク

44 44 44

瑞光山勝法寺

38 38 38

川島町歴史年表

44 44 44

二ツ森公園

39 39 39

岩の鼻

44 44 44

学島小学校

40 40 40

地蔵さん

44 44 44

麻植郡立農蚕学校跡

43 43 43

万葉植物園

44 44 44

猪垣の碑

42 42 42

城山の銅鐸

44 44 44

古い道・新しい道

41 41 41

排水機場の碑

44 44 44

古い道・新しい道

40 40 40

中央美化センター

44 44 44

上桜城址

44 44 44

白蓮山妙啓寺

44 44 44

公民館

44 44 44

大正池

44 44 44

岡山のミミカキグサ群落

44 44 44

徳島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

44 44 44

城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

44 44 44

岩の鼻

44 44 44

地蔵さん

44 44 44

麻名用水

44 44 44

大日寺跡

44 44 44

川島高等学校

44 44 44

城山の板碑

44 44 44

古城山真福寺

44 44 44

町内の巨樹・老木

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

44 44 44

城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

44 44 44

岩の鼻

44 44 44

地蔵さん

44 44 44

麻名用水

44 44 44

大日寺跡

44 44 44

川島高等学校

44 44 44

城山の板碑

44 44 44

古城山真福寺

44 44 44

町内の巨樹・老木

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

44 44 44

城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

44 44 44

岩の鼻

44 44 44

地蔵さん

44 44 44

麻名用水

44 44 44

大日寺跡

44 44 44

川島高等学校

44 44 44

城山の板碑

44 44 44

古城山真福寺

44 44 44

町内の巨樹・老木

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

44 44 44

城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

44 44 44

岩の鼻

44 44 44

地蔵さん

44 44 44

麻名用水

44 44 44

大日寺跡

44 44 44

川島高等学校

44 44 44

城山の板碑

44 44 44

古城山真福寺

44 44 44

町内の巨樹・老木

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

44 44 44

城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

44 44 44

岩の鼻

44 44 44

地蔵さん

44 44 44

麻名用水

44 44 44

大日寺跡

44 44 44

川島高等学校

44 44 44

城山の板碑

44 44 44

古城山真福寺

44 44 44

町内の巨樹・老木

44 44 44

川島のイワヒトデ群落

44 44 44

川島の峰

44 44 44

中央美化センター

44 44 44

排水機場の碑

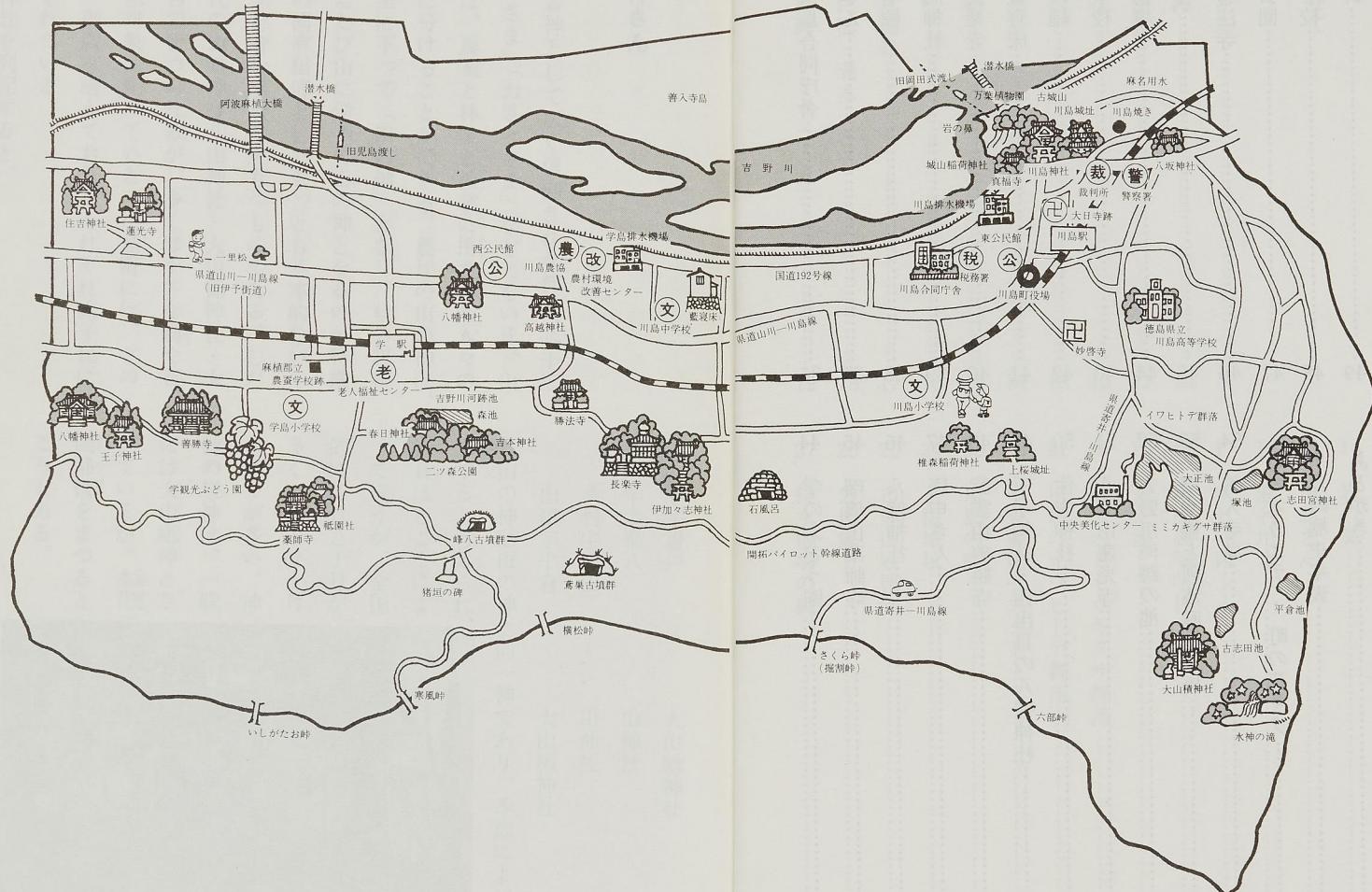
44 44 44

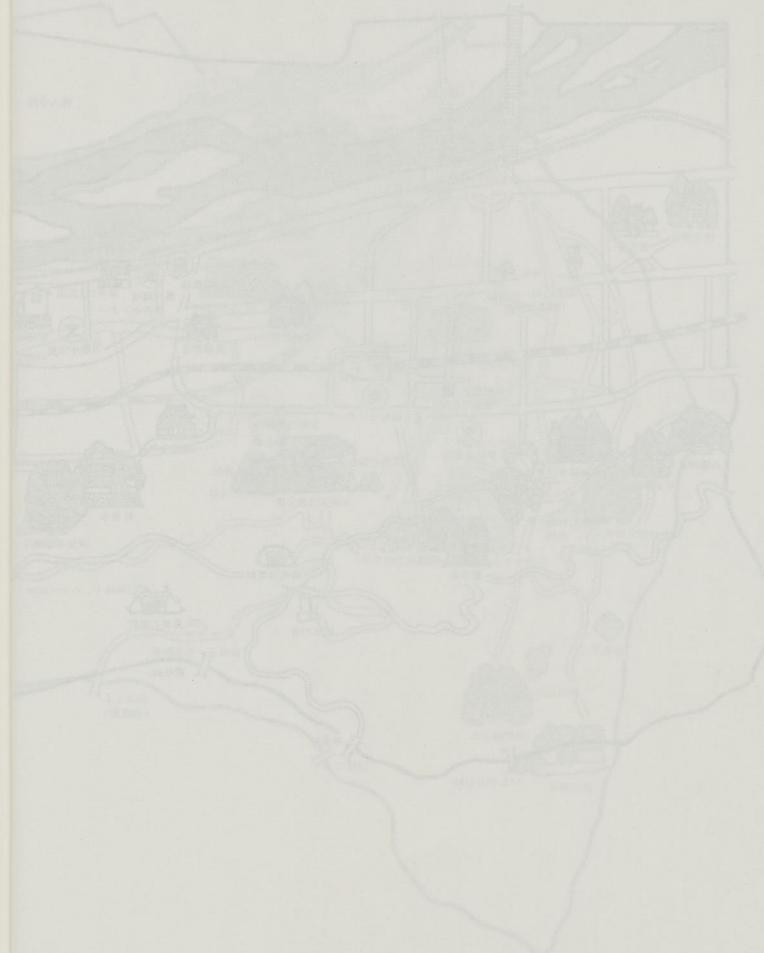
城山の銅鐸

44 44 44

万葉植物園

## ふるさと川島 案内図





## 1 山の神さん

山を司どる神として広く信仰された神で、「十二様」「さがみさま」「おさとさま」などともいう。山の神の信仰は、農業と林業と漁業に携わる人々の三つの集団に分けることができる。農民の山の神は、春に山から里に下つて「田の神」となり、秋の収穫が終るとふたたび山に帰つて山の神となるのが特徴で、日本人の固有信仰としても基本的ないくつかの神観念を含む重要性をもつものである。したがつて、農民の山の神は、山神社・大山祇神社・大山積神社の名でまつられるが、多くは小さな祠や石、自然の大木を対象に祀っている。川島町には、どの神社も拝殿、御殿を構えており、それぞれ氏子民によって奉仕されている。

町内の山神社を列記すると、

学字唐戸

大山祇神社

学字峯八  
桑村字岡山

山神社  
大山積神社

山田字平倉

山神社

山の神は田の神と同一神であり、季節によつて去来すると考えられ、

祭日はところによつて違うが、全国的に二月と十月が多く、町内は十月の祭りが多い。神社の祭神は、一般には大山祇神とされているが、木花開耶媛をまつるところもある。



山田の大山積神社

## 2 水神の滝

川島町の南東、海拔五二三メートルの湯吸山の中腹に、水神の滝がある。滝は、一〇メートル余りの断崖を、滝つぼめがけて落下する。

昔、この付近は、たびたび干ばつに苦しめられたので、人々は、滝の上に水神を祭つて、水源を護る神様とし、日照りの時にはここで雨乞いをした。滝つぼにつかって雨を祈る神主に、村人が一せいに水をあびせると、ふしきに雨が降ったという。滝の名前も、ここからつけられたのであろう。

滝の上方には、規模はやや小さいが、二の滝、三の滝があつて、岩盤を深くえぐつた水は、せまい岩間を走つて、深い淵にそそぐ。これらの滝を一巡するよう、遊歩道が造られていて、水神の滝の真上にかかる朱塗りの太鼓橋は山の緑に映えて美しく、

## 3 志田宮神社

この神社の祭神は、川島町には数少ない保食神である。（へし）は美称、（け）は飲食物一般の意味で、五穀や食物の神である。月読命は天照大神の命を受け、人間の食糧を求めて摂津国（近畿地方の一国）に下り、保食神にあつ。『摂津國風土記』。神が口から種々の食糧を出して、もてなしをした所、月読命はきたない物を食わすと怒つて、保食神を殺してしまうのである。そしてその後再び、天照大神が天熊人（あらみん）を遣わして様子を見させると、神の死体から粟、稗、稻、麦、大豆、小豆、牛、馬、蚕が生じていた。

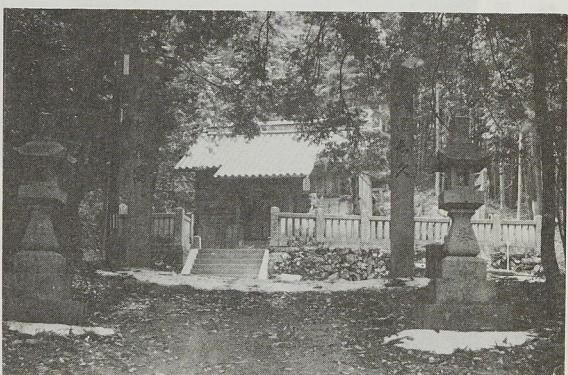
天熊人がこれを献すると、天照大神は喜ばれて、穀物の種子とされた。以上のような記述とほぼ同様のことが古事記に見える。この社は創立年代不詳であるが、もと志田池の下方に鎮座していたが、いつの

植樹された桜やツツジ、野生のヒオウギなどがかわるがわる花をつけ、わらび狩りやきのこ取りを兼ねて、ここを訪れる人が多い。

滝つぼから流れ出た水は、下流の山裾に築かれた多くの池に貯えられ、干ばつに苦しんだ岡山、山田台地をうるおし、また付近の景観もよいところから、観光地としても、開発されつつある。



水神の滝



志田宮神社

頃にか現社地に遷座された。天明六年（一七八六）の棟札があるので、それ以前の創建と思われる。寛保御改神社帳に「山田村志田宮大明神、神主敷地村左兵衛」とある。境内に文久元年（一八六一）辛酉八月十四日建設の燈籠があり、明治八年八月、村社に八月、村社に列せられた。この境内には大きな自然石を使用した地神碑がある。

#### 4 川島の石

川島町内には良質の青石があつて、前山の湯汲山や上桜の石切場から採掘して、建築や土木用として、各地へ送り出されていた。

前山や城山に見られる緑色の結晶片岩（塩基性片岩）は、緑色片岩とも呼ばれ、約二億年前、海底に噴出した玄武岩質の溶岩や、海底に堆積した玄武岩質砂岩、泥岩が、弱い変成作用をうけ片岩となつたものである。

「阿波の青石」として知られるこの岩は、褶曲構造や点紋をもつた火山岩の特徴が現われ、美しい模様を生じることもあり、水に濡れると、さらに色あいが深まるため、藍商人の邸宅や料理店の流し等に珍重された。

また、板状に割れるので、古墳や板碑の材料にも



川島の銘石紫雲石

なり、ゴヤの窪や横谷、鷹の巣の立て石のように、古代人の歴史と謎も残している。

前山の青石に混じつて、美しい紅色をした紅簾片岩も東西に走り桑村の雀岳に大きな露

出が見られる。紅簾石は、明治一〇年に徳島市の眉山で見付けて、世界に紹介されためずらしい石である。装飾用石材として徳島城にも使用され、水神の滝付近に多い紫雲石などとともにお禁め石として藩外への持ち出しが禁止されていた。紫雲石は紅簾石やマンガンなどを含み、赤紫の美しい縞模様がある。

全国に須佐男命をまつる社は約九千社。県下でも八幡神社に次いで多く、町内にも三社がある。神後

祭神は、須佐男命（素盞鳴尊）である。この神様は天照大神の弟神であり、気性の荒々しい神であつたことや、八岐大蛇を退治して奇稻田姫を妻にされたことなどは、よく知られている。須佐男命は、子孫に、農業と深いながりのある田の神や水の神など、多くの神々があることから、農業の守護神また生業の祖神として、信仰されてきた。

日本に仏教が伝わってから、この神は、インドの祇園精舎の守護神「牛頭天王」と習合されて、自然界の罪や穢れや悪魔を追い払い、悩める人々を救う神として信仰されるようになり、全国に天王社や祇園社としてまつられたものである。そのために、八坂神社はところによって、お天王さんとか祇園さんとよばれており、その祭日の祇園祭は、疫病悪魔退散を求め願う人々で賑わう。

#### 5 八坂神社



神後の八坂神社

習合によるものであり、旧六月七日の祇園祭は、現在も賑わっている。

## 6 川島焼

川島では昔から窯業が行なわれていたようである。山麓の古墳から出土した赤茶けた土師器は、岡山附近で造られ、大日寺の古瓦は西谷付近で焼かれたと推測されている。

岡山台地の基底は、約三百万年前に堆積された有機質を含む黒土で、陶工たちはめん土といふ。細工しやすく、千度ほどで焼かれて、こたつ、火鉢、火消し壺など、火を入れる「二度火もの」の原料になる。また川島高等学校付近の赤土は、おん土といって粒子が粗く、主に瓦土として使われた。

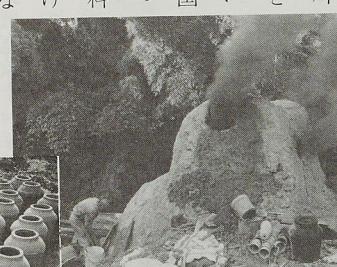
現在の川島焼きは天保の頃（一八三〇年代）より始まつたと伝えられるが、瓦以外の特殊な川島焼は、万延元年（一八六〇）東方兵衛によつて始められ、その子貞吉らが業を継いだ。貞吉は、明治十年、内

国勧業博覧会に土瓶を出品して褒状を受け、焼山寺の秘仏を模した三面大黒天像など、多くの作品を残した。また讃岐の人河津沢太郎は、岡山で瓦を焼き、各地の社寺に傑作を残し、その流れをくむ山下義勝は川島城の天主閣の鰐などを造つた。

こうして、川島には三〇軒を

越える業者がいて、一時は四国一の生産を誇つたが、近年燃料革命の波をうけて斜陽産業とな

り、現在山田にある瓦屋だけが、窯の火を守つてゐる。



川島焼の現場  
(東谷英一氏撮影)



川島焼の製品  
(島田忠一氏撮影)

## 7 川島城址



川島城址

国鉄川島駅の北東、天守閣（觀光）のそびえる城山一帯が川島城址である。天正初年、三好氏の一族、川島兵衛進はここに川島城を築き、ついで天正十三年（一五八五）、蜂須賀家政は家老林能勝に命じて城を修築し、兵三百をもつて守らせた。城は眼下に吉野川を望み、後に伊予街道を抑える水陸の要衝で、剣山周辺の土豪や上郡への備えとして阿波九城の一に指定されていた。『阿波国郡村誌』にはこの城のことを、「吉野川へ斗出した山上に本丸、平坦の地凡そ三四〇坪。下りて二の丸という平坦地凡そ三百坪。また少し下りて三の丸という平坦地、三百坪樹木なし。」と記されている。

城番林能勝は、兵法に勝れ、築城にも才を示し、徳島城も築いた。道感は隠居してからの名である。

童公園や農村青年の家などがある。また、城址一帯には「銅鐸出土の碑」「大日寺の礎石」「貞治の板碑」「宮の島移転碑」など石碑も多い。

8 川島神社

祭神は誉田別天皇・天日鷦命他。

当社の起源は、宮島宇宮の本に鎮座した浮島八幡宮を中心に、旧川島町内の四十四の神社を合併して大正五年十月現在地に社殿を移築し、川島神社と改称したものである。



川島神社

九）再興の棟札には、河島保内八幡宮とあり、古くから川島保の領主や地頭、川島城、主徳島藩士赤堀良亮の「阿府志」（宝暦～寛政年間に編集）

であった。寛永六年（一六二九）再興の凍札こは、河島保

した。  
また例大祭の十月二十二日には、県下まれにみる  
「七十五膳の神事」がある。神饌舎においておごそ  
かに調製した七十五種のお供えが、七十五台の三方  
にのせ、宮司及び氏子総代の手によつて神前に供え  
られる。またこの境内には古くから皮膚病に効果が  
あると伝えられる東道神社がある。

に、「この村に仏事のいとな  
みなく死者は他村に葬るので  
墓もなく……天正の頃川島城  
主林道感が八幡宮と名づく」  
とある。ところが吉野川改修  
工事のため宮島を含む善入寺  
島全戸が、移転を余儀なくさ  
れ、この時町内の他社も合祀し  
た神社である。現  
在の社地は森巖の様を呈し、官國幣社制限図を参酌  
して社殿も宏壮な構えである。昭和十八年郷社に列



七十五膳の神事

9 古城山真福寺

真言宗大覚寺派貞福寺は、天正年間（一五七三）一五九二）に川島城主、川島兵衛（おのえのぶひし）進が、城山山頂付近に建立したのが、始まりである。

この時代には、川島町も戦のうすにまきこまれた戦火により全焼した大日寺より、川島兵衛進が、本尊「虚空蔵菩薩」と脇本尊「十一面觀音菩薩」を喜天などを持ち出し、寺を建立し、護持仏にしたといわれている。

まもなく、川島兵衛進は、長宗我部軍の阿波侵攻にさいし、三好一族の争いにまさこまれて脇町において討死した。

それ以来、この寺は衰退していたが、蜂須賀氏が阿波国守になつたとき、家臣林能勝によつて修復された。



古城山真福寺

うて、この寺の由  
の制度により、川  
の地を離れ、この  
この寺中興の法印  
宥性上人は、小  
松島地蔵寺に合  
併していた真福  
寺の寺号を得て  
古城山の中腹に  
再建し、現在に  
至っている。封  
建の世の榮枯盛  
衰を物語る閑静  
な寺である。

10 川島町の巨樹・老木

日本で一番大きな木は、土佐の大杉で、徳島県の最も古い木は、加茂の大グスである。いづれも千年以上を生き抜き、古い歴史を物語るように偉容を誇っている。

わたし達の祖先は、自然の中に生き、自然に育つ。それで栄えてきた。今日の産業や文化も、皆この自然から造り出されたものである。したがって、祖先は常にこの偉大な自然を愛し、尊び護ってきた。今日生残る神社の森や大木には、こうした祖先のうるわしい血や魂が通っている。

川島町の巨樹一覽

11 城山の板碑

板碑はふつう「いたび」と読む。関東地方で始まり、鎌倉幕府の家人けいにんが各地に広めた。鎌倉・室町時代に多く造られた一種の卒塔婆そとうばで、武藏型・九州型・阿波型などがある。

阿波型板碑は、板状の青石の表面を磨き、へ形の頭部と長方形の身部からできている。身部の上方に二条の横線、その下に阿弥陀、觀音、勢至の三尊の種子を彫つたり、弥陀や地藏、五輪塔などの画像を線刻し、造立の趣旨や年号などを彫つたものもある。これによつて当時の豪族の氏名や、南北朝の年号があればその勢力範囲を推察することができる。

城山真福寺上方にある三基の板碑のうち、もつとも大きなものは高さ一、七二メートル、幅五一センチメートル、厚さ五センチメートルの青石で、県内



城山の板碑

上に、阿弥陀如来（キリーグ）その下に觀音（サ）  
屈指のりっぱなものである。碑面上方には蓮華座の

届旨のりっぱなものである。碑面上方には蓮華座の上に、阿弥陀如来（キリーグ）その下に觀音（サ）勢至（サク）の二菩薩の種子を薬研（やくげん）彌（み）にし、蓮（れん）花（けい）瓶（びょう）と香炉（こうろ）を供え、その下に「十方仏土中唯一乘（ゆいじゆう）經（きょう）、無（む）二亦（よ）無（む）三、除（じよ）仏（ぶつ）方便（へんせつ）説（せつ）」「右志者（さきこころざはな）等（とう）尊（そん）菩薩（ぼさつ）」と刻まれてゐる。隣のものは五輪塔の絵と、応永（おうえい）三年、他の一つは三尊種子に永和五年（年号はすべて北朝）と刻まれてゐる。

ムクの巨樹（児島八幡神社）



トクの巨樹（児島八幡神社）

エムノクノキ  
 ハゼノキ  
 全  
 八坂神社  
 峯八片山家  
 薦が巣家  
 呂島幡神社  
 居四  
 二、二、一、三、  
 一六  
 ト  
 ○八五五  
 ○二〇五六

## 12 城山の銅鐸

銅鐸はわが国独特の謎の青銅器で、弥生時代後期に突然出現し、まもなく消滅した。その用途も初めは樂器として造られ、後に祭祀用具になつたのであらうといわれ、ほとんどが、人里に近い丘の斜面の土中から発見されている。近畿を中心 중국・四國中部地方のいわゆる銅鐸文化圏から三五〇個ほど発見され、九州を中心とする銅劍文化圏に對抗する文化圏が存在していたことを示している。徳島県からは四十個あまりが出土し、滋賀県について多い。これは、鮎喰川周辺の銅鉱や、那賀川流域に産出する朱の原料の辰砂を、畿内に積み出した見返りとして、送られたともいわれている。

明治十八年五月、川島町城山二の丸跡の土中から発見されたものは、その後転々として現在は、兵庫

県西宮市の辰馬考古資料館に保管されている。

銅鐸はその文様によって、横帶文式、定型式、突線帶式等にわけられ、定型式は袈裟襷文と流水文に分けられる。城山出土の銅鐸は流水文で、高さ四七、一センチメートル、円筒部の高さ約三四センチメートル、鈕の高さ約一三センチメートル、鰐の幅は三センチメートルの小型で、下部に補修した跡がある。



城山出土の銅鐸 (西宮市・辰馬悦藏氏蔵)

## 13 万葉植物園

万葉集は、今から一二〇〇年程前の、天平宝字三年（七五九）以後につくられた歌集である。その中には、多くの自然や植物が詠まれており、当時の人々が、如何に自然に親しみ、植物を愛好していたかを、うかがい知ることができる。植物が占める歌は、およそ一五〇〇首で、全歌集の三分の一にあたり、その種類も一五〇余種に及んでいる。

本町の城山に万葉植物園を計画したのは、昭和十五年のことである。ここには、植物が豊富で、種類が三〇〇余種に及び、万葉植物も、町内のものを併せると八〇余種が数えられる。さらに、資料は、遠く北海道を始め、県内各地から集めた。区域は、川島神社の裏山一帯と、岩の鼻南側の水生園地域に分けられている。



万葉植物園遊歩道

開園は、昭和五十九年四月で、この植物園が、ほんとうに植物園としてその機能を果し、人々から親しまれるようになるのは、今後のことである。それまで、町民の協力によつて、これを守り育てて行かなければならぬ。

春の野にすみれつみにと來し吾ぞ

野をなつかしみ一夜ねにける (山部赤人)

久方の雨も降らぬか  
はちす葉に  
たまる水の玉に  
あらむ見む  
(二六・三八三七)  
秋風は涼しくなりぬ  
馬なめて  
いざ野に行かな萩  
が花見に

## 14 岩の鼻

岩の鼻は、吉野川に大きく張出した丘で、結晶片岩（塙基性片岩）のかたい岩盤でできている。その岩頭に立つと、展望は大きく開け、吉野川を挟んで、南方には高越山から種穂山を経て、穴吹方面を望み、北の方では、阿讚山脈の城王山から大滝山や竜王山を経て、池田の雲辺寺山が望見できる。

その視界は、阿波・麻植・美馬・三好の西阿四郡に及び、昔ここに川島城（天守閣はない）を築き、西阿の守りとしたのも、無理からぬことである。元和元年（一六一五）、その城は廃城となつたが、その後この地に西民政所が置かれ、さらに、時代とともに麻植郡役所・阿波麻植地方事務所・警察署・税務署・区裁判所など、いろいろな役所が置かれ、川島は、常に政治や教育の中心地として、今日に至つて

いる。

また、大正十三年には、この一角に忠魂碑が建立され、明治維新以来、護国のために殉じられた人々の英靈一六一柱が合祀されている。

さらに、この一帯は、公園として遊歩道や展望台などが設けられ、町民の憩いの場となるとともに、新四国の靈場もつくられている。

## 15 地蔵さん

岡田十 手写本



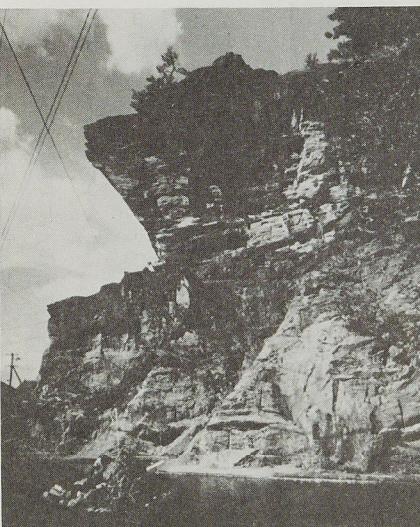
浜の地蔵さん

像を建てるようになつたのは、江戸時代の後期から

である。川島町内にも、大小合わせて、十余基が建立されていて、地蔵信仰が盛んであつたことを物語つていい。

長楽寺の境内にある地蔵菩薩坐像は、町役場前の薬師庵から移転したもので、その台座には「日は入りぬ、月はまだ出ぬやみの夜の、六つのちまたに立つは君が身」と刻まれている。これは「釈尊が亡くなられ、次の救世主弥勒菩薩は、五十六億七千万年の後でなければ現われない。その間、末法無仏世の時代に、六道のちまたに迷う衆生を救つてくれるのは、地蔵さんである」という意味である。地蔵信仰は、末法思想の流行した平安中期に始まり、地蔵講や地蔵盆などの行事も生まれたが、道ばたにその石

籠流しや花火大会が盛大に催される。



岩の鼻の巨岩

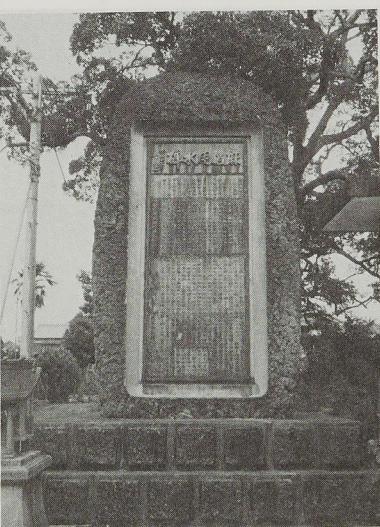
## 16 麻名用水

麻名用水は、城山の南側、吉野川が岩の鼻につき当る所を水の取入口としている。その水路は、トンネルで城山をくぐつて北東部に口を出し、さらに道路下を抜けて城東部落を東に走り、神後で鉄道の下を横切つて、鴨島町へと流れている。

この用水は、旧森山村と牛島村（ともに現鴨島町）旧高原・浦庄・石井（ともに現石井町）の旧五か村が、水稻栽培の干害対策用水として、明治三十七、八年（一九〇四、五）の日露戦争戦勝事業に取上げ、記念麻名水利組合（現麻名用水土地改良区）を結成して開設したものである。

工事は、明治三十九年着工、当時の金で総工費およそ五十万円をかけ、同四十一年に完成通水した。幹線水路は二十六キロメートル、水利面積は一三一

二ヘクタールに及び、今日も尚水稻栽培に多大の効果を挙げている。初めは、両岸が石積みで構築されたため、いろいろな魚類やカワニナが棲み、ホタルが繁殖して、初夏の夜には、無数に発生し、周辺を螢光で飾った。また、周辺はこし水で潤されたが、昭和五十年全域にわたつてコンクリート張りに改修されたため、現在は状況が変つた。現在、城山下の取水口には、麻名用水碑が建てられている。



麻名用水碑

## 17 大日寺跡

いるが、位置その他の  
は不詳とされている。  
ところが、昭和四

川島駅付近には、「白鳳時代（約一三〇〇年前）に創建され、一町四方の規模をもつ大きな寺があつたが、長宗我部の兵乱で焼かれて、廢寺になつた。」という伝承がある。

これを裏付けるように、付近には焼けた布目瓦が散乱し、城山の本丸跡には、塔の心礎という柱座のある青石がある。また昭和三十九年刊行の徳島県史には「白鳳時代郡衙の近くには、大きな寺があり、



大日寺跡  
記され、大日寺もその一つに数えられて



大日寺の礎石（城山）

その経費の一  
部は国費でま  
かなつた」と  
記され、大日  
寺もその一つ  
に数えられて  
いるが、位置その他の  
は不詳とされている。  
ところが、昭和四  
十七年十二月と五十  
一年六月、高田幸雄  
氏邸付近から外輪無  
文十葉单弁蓮華文の  
鎧瓦が発掘されて、白鳳創建が裏付けられ、それらの瓦が西谷で焼かれたこともわかつた。

その後の調査によつて、寺域や金堂、塔、門、経蔵、僧坊の位置なども推定され、白鳳期に創建された寺院に多い法起寺形式の伽藍配置でなかつたかと思われるが、さらに今後の調査研究に待つところが多い。

川島町に白鳳創建の古寺があつたということは、郡衙の存在を裏付けて、わたしたちの町が古くから、郡の政治、宗教、文化の中心であつたことの証明にもなるのである。

川島町に初めて旧制の県立川島中学校が創設されたのは、明治十三年（一八八〇）のことである。当時は、県立徳島中学校（現城南高校）と共に、県下で数少ない旧制の中学校であった。生徒は郡内外から集まっていたが、残念ながら六年後の明治十九年廃校となつた。

現在の川島高等学校は、大正十三年（一九二四）、県立麻植中学校として創立されたもので、翌年十二月、麻植郡農会公会堂の仮校舎から、岡山の新校舎（現在地）に移転した。

その後、新制度のもとに、麻植高等学校となり、昭和二十三年、川島高等学校と校名を改称し、今日に至つている。

現在の鉄筋コンクリート四階建の校舎は、昭和五

## 19 大正池

大正池は、岡山の上桜保養センターの下にあり、コイやワカサギが放たれ、アヒルが遊泳して景勝の池となっている。山田や岡山の台地は、水利の便が悪く、田畠は毎年水不足になやまされ、旱ばつの年には、度々凶作で苦しんだ。それを救つためにづくられたのが、この池である。

この溜池は、今から百三十余年前の嘉永四年（一八五〇）、当時の貢取役であった後藤田貞資氏が提唱してこれを計画し、藩の指導を受けて、毎日三百五十人を動員し、一年近くをかけて構築したものである。その面積は三、四町、水利面積は三十数町に及んだ。当時はこれを新池と呼んだが、大正四年西側にこれを拡大したため、併せて大正池と呼ぶようになった。その後、昭和三十八年再び旱ばつで水不



景勝の地・大正池

足に悩まされる。  
たため、吉野川の伏流水を汲み上げるようになり、今日に及んでい

る。

また、明治

三十七年には、古志田池と平

倉池、昭和十六年には塚池

を新設して下部の水田を潤し、同二十一年には、源光寺池が設けられた。

こうした溜池は、田畠を旱ばつから守り、耕地の利用価値を高めて、農業振興に大いに役立っているが、先人の努力や功績を忘れてはならない。

十年、木造校舎から改築されたものである。在校生はおよそ九百人で、遠くは徳島市や名西、美馬など各郡から通学している。

かくて、創立以来六十年、古い忌部の歴史ある丘にあって、至誠無怠の校旗のもとに培われた卒業生は、一三八〇〇余名に及んでいる。これらの中卒業生は、今日全国各地に発展し、政界、実業界、教育界等で盛んに活躍を続いている。



昭和54年新築なった県立川島高等学校

## 20 岡山のミミカキグサ群落

岡山の大正池には、周辺にいろいろな湿地植物が生える。夏の頃には、仏前花の名で知られるミソハギが群生して、紅紫色の花を開き、シロバナサクラタデが乱れ咲いて、風情をそえる。また、池の水が干上がるとき、アゼムシロやヒメホタルイが斜面をおおう。さらに、湿った地面を黄色の花で飾るのは、ミニカキグサである。

ミニカキグサは、タヌキモ科の小さな食虫植物である。その地下茎は、糸のように細く、ところどころに小さな捕虫袋をつけ、それで小さな動物を捕えて養分とする。葉は細い線形で、やつと地上に出るに過ぎないが、そのもとにも捕虫袋をもつ。茎は高さ一〇センチメートル足らずで、夏秋の頃、先の方に黄色の花を二～三個つける。がくは花が終つて成

長し、耳かき状を呈するので、この名がある。

ミミカキグサは多年生の植物で、雨が多く、池にいっぱい水がたまると、沈んでしまうが、翌年にはまた発生し、絶えることがない。世界の熱帯や暖帶に広く分布するが、県内には産地が少い。岡山のこの生育地は、吉

野川南岸の珍らしい自生地で、町の天然記念物として保護されている。



ミミカキグサ群落

## 21 川島のイワヒトデ群落

岡山の大正池の吐出口と山田の塚池下流の湯吸谷には、イワヒトデが群生する。いづれもカシ林が茂る暗い谷間の岩上である。

イワヒトデは、ウラボシ科の多年生の常緑のシダで、山の湿った木陰に生え、岩の上などをほうとうよく群落をつくる。茎は緑色で太く、葉は長い柄があり、葉身が人間の手をひろげたように切れ込むので、岩人手とこの名がある。胞子葉は、栄養葉に比べると細く、その裏に多数の胞子嚢をつける。

県南の暖かい地方に広く分布するが、県北には極めて少い。本町は、吉野川筋の唯一の自生地で、前記二か所が天然記念物に指定されている。

シダ類は、花が開かず、胞子で仲間をふやす下等な植物で、日陰に好んで生える。したがつて、谷間



イワヒトデの群生

によく生え、本町にはその種類が多い。フモトシダやホシダなどの外、ヤノネシダ、クリハラン、ミズスギ・カタヒバ・フユノハナ・ワラビなど、いろいろ珍らしいものもみられる。山へ散歩に出た時などには、これらのシダによく注意したいものである。

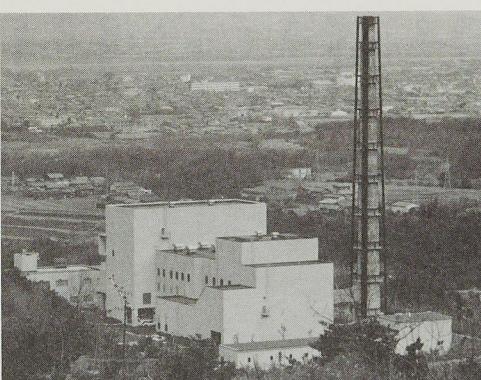
中央美化センターは、岡山のみはらしの良い高台に、一年四か月の工期と十億円の資金をかけて、昭和五十四年三月に完成した。

清掃工場の建設は、一つの町や村で小さいものを作るより、いくつかの町村が共同で、大きい良い施設を作る方が、最新式の高性能機械を備えることができ、公害の防止にも大きい力を發揮することがであります。

中央美化センターは、とくにばいじん・汚水・排

水・騒音・臭気などの対策に重点を置いて設計された。地上三階、地下一階建てで、焼却炉は、一日に八時間運転させ、三五トンのゴミを処理する炉が二つある。煙突の高さは、五八メートルあり、水蒸気を排出するが煙害を起すことはない。

また、一八七〇〇平方メートルの広大な敷地内には、約一〇〇種類の木や花が植えられ、付近の環境との調和に心がくばられていく。昭和五八年度には、農林大臣賞を受賞した。



中央美化センター

### 23 川島の峠

川島町と美郷村の境には、東西に伸びる山脈があり、その稜線に沿うて細い山頂道路がある。昔から美郷村と川島町は、六部の峠、奥丸峠、横松峠、寒風峠、石がたお峠など、峠の道が人のゆききや物資の交流の動脈であった。その頃は、美郷村から山川町への道路が悪く、迂回するには大変な時間を要した。しかし、最近の道路の改良と自動車の普及によって、急速にこれらの峠の交通は激減した。その中で、県道川島・寄井線の奥丸峠は、自衛隊によつて拡張され、完全舗装して立派な道路になり、東山を経て神山町まで通じるようになった。名前も堀り峠とか、またこのごろでは桜が沿道に植えられたことから、桜峠とも呼ばれるようになつた。しかしその他の峠は全く忘れられ、今では通る人もなく、



美郷村と結ぶ桜峠（堀割峠）

きが多かつたことが、ついこの間のことのように思われる。石がたおの峠には伝説がある。弘法大師が、高野の窪に寺院を建立しようとして、湯下谷と吉野川から運んだという大きな立て石があり、これを見る時、伝説がほんとうのようと思われる。

雜木や落ち葉におおわれ、ハンターやきのこ狩りの人達がたまに通る程度になつた。これらの峠も、戦後の時代には、買物資不自由ない出しの商人や村人のゆき

上桜城址は川島駅の南方、前山の中腹にある。山<sup>やま</sup>裾<sup>すそ</sup>から険しい坂道を登ると、しばらくして、大きな手洗鉢の前に出る。ここから左手に行くと本丸、右にとれば西の丸に出る。

本丸は海拔一四三メートル、二の丸、三の丸を廻<sup>まわ</sup>らし、東方は断崖<sup>だんがい</sup>である。広さ約五〇アール、麓の川島の町並や伊予街道、さらに吉野川を距てて、北岸の様子が手に取るように見える。西の丸も約五〇アール、西は断崖で南と北には空堀<sup>かくぼ</sup>があつて、この方面からの敵を防いだ。空堀は、深さ約五メートル、幅約三メートル、東西の長さ一〇メートルほどで、通行のための幅約三〇センチメートルの、「掘り残し」がある。また麓には桜の丸、高丸、荒神丸などの郭があり、さらに城山も含めた大規模で、要害堅固な

山城であつた。里城<sup>さとじょう</sup>は川島小学校付近にあつたといわれ、馬場跡<sup>ばばあと</sup>や馬場屋敷などの名前が残つている。城主篠原長房（紫雲）は戦国末の武将で、三好家の侍大将として度々畿内<sup>みかつち</sup>に出兵し、その経験を生かして、この城を築いた。しかし、元亀三年（一五七二）、ざん言によつて退けられ、阿波・讃岐・淡路・紀伊の兵七千に攻められて落城、紫雲父子をはじめ城兵全員が戦死した。

城の麓には両軍戦死者の慰靈碑<sup>いれいひ</sup>がある。



戦跡を残す上桜城址

## 25 白蓮山妙啓寺

祭り、出城としたので、荒神丸とも呼ばれている。

法華宗白蓮山妙啓寺<sup>びゃくれいしゆ しられんざん みょうけいじ</sup>は、昭和二十五年、この地方を巡錫<sup>じゅんせい</sup>した法華宗管長三好日照が、県内各地に散在していた信者を組織し、同二十九年、桑村宇山ノ神の現在地に、「宗教法人法華宗妙法教会」を設立して、「十界勸請の曼荼羅」を、本尊とし、布教と修業の道場を築き、現住職平島啓益が管主となつた。その後、同五十年、本堂の新築を機に、「妙啓寺」と称するようになつた。寺には、日蓮上人座像や日隆上人筆の弘經抄<sup>こうきょうしょ</sup>がある。また境内には、法華題目碑<sup>びげだいもひ</sup>や、川島合戦戦没者の慰靈碑等があり、毎年四月二十八日と十月十三日の縁日には、県内外からの参拝者でにぎわう。

寺城は上桜城の北東にあり、ここが鬼門にあたるの、篠原紫雲は、ここに城の鎮守として荒神社を



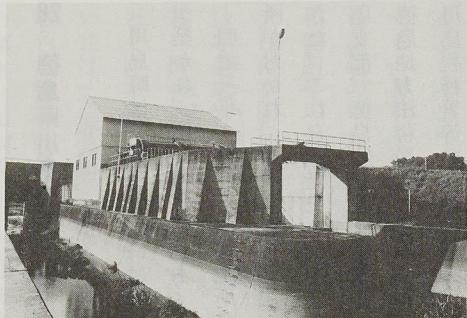
白蓮山妙啓寺

希望することができる要害の地で、大正のころまでは、クスやヤマモモの大木が、うつそうと茂つていた。また付近からは、石斧<sup>せきふ</sup>や石棒<sup>せきぼう</sup>、勾玉<sup>くがたま</sup>、銅環<sup>どうわん</sup>、須恵器<sup>すえき</sup>などが、出土している。

## 26 公民館

第二次世界大戦後できた「公民館」は、全く耳新しいものであった。現在のような施設が何一つあつた訳でなく、学校や神社やお寺の一室を間借りしたものであつた。その後、昭和二十四年六月に公布された社会教育法によつて、公民館に関する法的根拠が示された。これに基づいて、順次施設の整備が進められ、地域住民の学習の場として、各種の行事が催され、住民の教養の向上、文化の振興に役立つてゐる。現在、地区公民館として、川島地区に川島東公民館、学島地区に川島西公民館の二館が設置されており、またそれぞれの地域に分館および集会所が設けられ、それらの数も三十四施設を数えるにいたつてゐる。

川島東公民館



川島排水機場

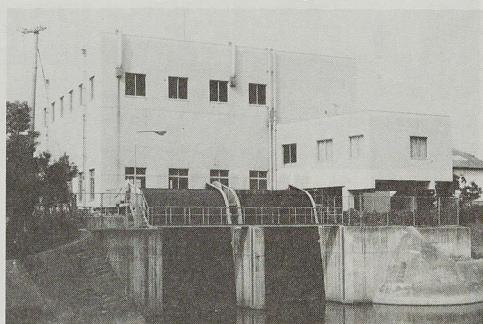
## 27 排水機場の碑

豊かな流れを誇る吉野川は、本県の産業基盤や生活環境の上に測り知れない自然の恵をもたらし、文化を培つてきた。しかし、その反面、雨季には洪水によつて、沿岸住民は悩まされ、わが川島町もその例外ではなかつた。

大正年間に、吉野川の堤防が完成し、洪水による直撃の災害は除かれることはいえ、吉野川の漏水や豪雨の際の、桑村川、学

島川の氾濫は、人畜や、農作物に被害を及ぼし、町の発展を阻む大きな原因となつてゐた。

この宿命的な水禍を克服することは川島町永年の宿願であったが、昭和三十九年六月、川島排水機場が完成、



学島排水機場

同四十一年六月、学島排水機場も相次いで完成した。

排水機場の碑は、こうした宿願を達成した記念として、治水の由来を刻し、先人の鴻業を讃えるとともにその恩澤に感謝するもので、昭和四十七年十一月建てられ、町の将来の発展を象徴するかのように立つてゐる。



東公民館

昭和二十三年、元川島税務署跡の建物を利用し、川島公民館として発足。昭和三十七年川島西公民館の新設で川島東公民館と改称した。昭和四十一年元川島警察署跡の建物に移転、さらに昭和五十四年三月、元川島小学校跡に新築移転し現在にいたつてゐる。

川島西公民館

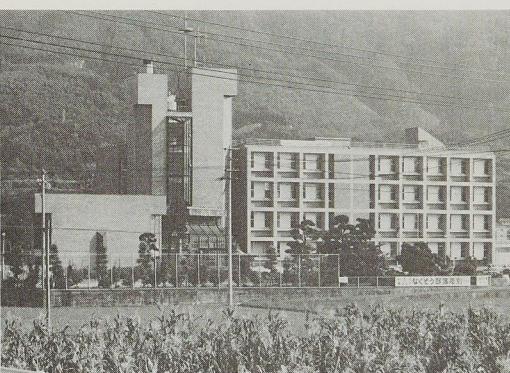
昭和二十四年、学島公民館として学島小学校内に発足した。昭和三十七年、現在地に新築移転し川島西公民館と改称し、今日に及んでゐる。

なお、この施設は、十川安三郎氏からの敷地の提供と、小原新平氏よりの建設費に対する私財寄附によるものである。

川島町は、藩制時代には、阿波九城の一つ川島城が築かれ、西阿の要衝であつた。

明治三年、徳島藩四民政所の一つとして、西民政所がおかれて、西阿四郡の司法、行政の中心をなしてきました。これらの歴史を継承して、徳島地方裁判所川島支部、徳島家庭裁判所川島支部、川島簡易裁判所、徳島地方法務局川島支局、徳島食糧事務所川島支所、川島税務署等の国の機関や、川島警察署、川島財務事務所、川島福祉事務所、川島農林事務所、川島農業改良普及所、川島蚕業指導所、川島土木事務所、川島農村青年の家等、県の出先機関が相次いで設置せられた。また川島高等学校が設立され司法、行政、教育、文化の中心地として発展してきた。

時代の進運と行政の効率化のため、城山一帯に分



徳島県川島合同庁舎

川島農業改良事務所、川島土木事務所等を取容して、行政の効率化と県民サービスの向上に資している。

散していた県の一般行政機関が一か所に集中せられることになった。昭和四十七年三月、国道一九二号線沿いの川島字南中須の現在地（敷地総面積一四二六六平方メートル）に鉄筋コンクリート四階建の徳島県川島合同庁舎が完成し、川島財務事務所、川島福祉事務所、川島農業改良普及所、川島蚕業指導所、

『山城風土記』に次のような伝説がある。奏中家忌寸らの遠祖奏公伊呂具は、餅を的にして矢を射たところ、餅が白鳥となつて飛び、三が峰の山上にとまり、そこに稻が生じた。ふしげに思つた伊呂具が、そこへ神社を建て、伊奈利社と名付けたのが稻荷神社創建のいわゆで、『二十二社註式』では、これが和銅四年（七一二）のことである。京都の伏見稻荷大社は全国三万余の稻荷神社の總本山である。祭神は宇迦之御魂神、佐田彦神、大宮能賣神の三柱である。御魂神の宇迦（ウカ）は「食べもの」をさし、とくに主食である米の生育を守る神である。稻荷といえば、「赤鳥居」が多いが、その赤は豊年を象徴する色と伝えられている。また「初午」は、稻荷大社の鎮座が和銅四年の二月初めの午の日で、その記



城山のお稲荷さん

念日に執り行われる祭をいう。町内には二社鎮座されているが、城山のお稲荷さんは、今から二五〇年ほど前に御鎮座になり、古くから地元の崇敬厚く、毎年の祭もにぎやかに行なわれていた。戦後一時とだえていたが、再建の声がおこり、昭和五十五年十月有志協力して、同年十二月完成、盛大な遷座祭を行ひ現在に至つている。久保田の椎森稻荷神社は、およそ五十二年前、川村惣平氏が伏見稻荷から分社し、現在有志で祭られている。

## 30 川島小学校

麻植郡に学校と名のつく学校が出来たのは、慶應二年（一八六六）、川島城山の長樂寺（明治三年現在地に移転）に郷学校が誕生したのが始めてである。明治四年、川島小学校、同六年、桑村小学校と山田小学校が創立、同三十七年、三小学校が合併し、始めて現小学校の基礎が確立した。同四十年には、桑川村が町制をしいて川島町となるに及んで、始めて川島尋常高等小学校となつた。昭和十六年、一時国民学校と校名を変更、同二十二年、新学制のもとに六・三・三制が施行された際、高等科が中学校として独立、現在の小学校となつた。

校舎は、明治四十一年城山から南寺の東公民館のある所に移り、さらに、昭和五十年現在地に新校舎を建設して移転した。校地の総面積は二万一千m<sup>2</sup>、

校舎面積三〇

三五m<sup>2</sup>、運動場一万m<sup>2</sup>、体育館は六四〇

m<sup>2</sup>である。児童数は、昭和五十九年度現

在一年六〇名、二年七〇名、

三年七九名、四年八七名、五年七二名、

六年七七名で、総計四五名。先生は、校長以下一九名である。卒業生は、明治時代五三七名、大正時代一〇一五名、国民学校七〇四名、新制小学校七五七三名、昭和五十八年度末総計九八二九名である。



川島小学校旧校舎

## 31 伊加々志神社

延喜式内小社伊加々志神社は、高い石段をのぼりつめると、松や木々の風もさわやかな所にあり、川や町が一望できる丘の上に鎮座されている。またこの社は俗に日命大明神といわれ、『阿波志』に「伊加賀志祠、延喜式亦小祀となす。桑村に在り即ち伊迦賀色賣命俗に伝う日命と……其地伊迦賀志と名づく、竹多しかつて没して川となる。因て祠を山麓に移す」とある。また『阿府志』にも「桑村山の麓にあり、俗に日命大明神、今は伊加加志大明神、祭神一座伊迦賀色許賣命……」と同様に記している。

今、桑村の吉野川ぶちにイカガシという土地があり、桑村の後藤田金平氏裏のあたりが元社地であつたらしい。その竹藪の所にまつられていたが、洪水の禍をうけて山麓の現社地に遷宮されたという。地名の



伊加々志神社

大明神は日命大

明神にちなむ。

また皇室から大

明神の号を奉り

日ノ命大明神と

称したが、明治

三（一八七〇）

年十一月四日伊

加々志神社と改

称、昔から神地、

神戸があり維持

して來たが、明治三庚午年十一月徳島藩西民政所

（在川島）から米五斗および幣帛の供進あり、明治

四（一八七一）年五月、神社の社格制定の際郷社となり、明治三十九（一九〇六）年勅令第九六号によ

る神饌幣帛料供進会計法適用指定の神社であった。

この寺は真言宗御室派に属し、古く鎌倉時代に創建されたとも、室町時代とも言われている。現在の川島郵便局付近にあつたが、明治三年、十八代住職宥性の時、現在地（桑村宇大明神）に移転された。江戸時代には、八か所の末寺を持ち、麻植郡内で最も格式の高い名刹として知られていた。

また、この寺は数々の貴重な仏像が今も伝えられている。阿弥陀如来立像は本尊であり、この仏を信じるとどんな人間でも極楽往生することができると言われている。

他に、不動明王立像、青面金剛立像、愛染明王坐像、十一面觀音立像ほか多数あり、仏画も所蔵されている。昭和五十年現在地に新設合併した校地の施設面積は二万一千坪

この寺は、古く鎌倉時代に創建されたとも、室町時代とも言われている。現在の川島郵便局付近にあつたが、明治三年、十八代住職宥性の時、現在地（桑村宇大明神）に移転された。江戸時代には、八か所の末寺を持ち、麻植郡内で最も格式の高い名刹として知られていた。

また、この寺は数々の貴重な仏像が今も伝えられている。阿弥陀如来立像は本尊であり、この仏を信じるとどんな人間でも極楽往生することができると言われている。

他に、不動明王立像、青面金剛立像、愛染明王坐像、十一面觀音立像ほか多数あり、仏画も所蔵されている。

また、寺境内に虚空藏堂がある。この虚空藏堂は、もと長樂寺から西五〇〇メートルほどのところにあつた虚空藏庵を移したもので昭和四年頃に建立された。また、その後、近くにあつた釈迦堂と薬師庵を合併吸収している。この中には、室町時代の作で本尊の虚空藏菩薩坐像が安置されている。他に釈迦如来立像や薬師如來坐像など、昔を偲ばせる貴重な仏像が多く所蔵されている。



加岳山長樂寺



現在に残る藍寝床 (桑村・後藤田重雄家)

明り窓があり、雨天の時の作業用に大きなおおぶた(軒)をつける。床は糸殻(じくがら)をしいた上を赤土で固めて、水の吸收をよくする。乾燥した葉藍を床に広げ、水を打つて、茎でおおい醸酵させる。十日ほどで切り返しては水を打つ。これを十数回くり返すと染ができる。葉草は玉白で搗き固めて藍玉(あいだま)にし、全国に売りさばいて、藍染めの染料についていた。

現在も町内にはいたる所藍寝床を見ることができる。

藍師は、葉藍を、寝床で寝させる。寝さすといふのは醸酵させることで、そのための建物が寝床である。寝床はふつう白壁の二階建てで、格子のついた

### 33 藍作と藍寝床

近世後期から明治末まで、川島町は優良な藍を生産し、藍師が活躍した土地であった。

藍は節分のころ苗床に種をまき、七十五日ほどで畑に移植する。その後も施肥、中耕、灌水のための水取りなどに多くの手間を要する。そして七月月中旬早朝に刈り取り、夜小さく切つておく。翌朝庭に広げて藍摺ですつたり、唐竿でたたいて天日で乾燥させ、唐箕で葉と茎を分けて、俵につめる。この作業を「藍粉成し」という。「阿波の北方起上り小法師、寝たと思ったら早起きた」という作業歌のように藍作は重労働の連続であった。

藍師は、葉藍を、寝床で寝させる。寝さすといふのは醸酵させることで、そのための建物が寝床である。寝床はふつう白壁の二階建てで、格子のついた

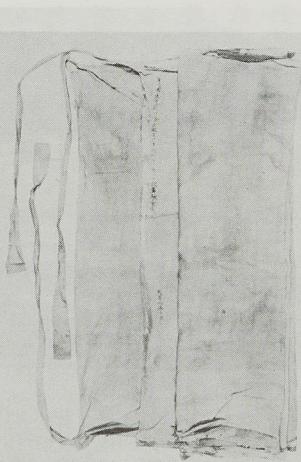
奈良の東大寺正倉院の宝物は、毎年その一部が公開されている、その中に「阿波國麻殖郡川嶋少楮里戸主忌部為麻呂戸調黃施壹疋 天平四年十月」と書いた「覆物」のあることが、郷土史家によつて県内に紹介された。これは「阿波國」と記録された最古の資料である。

「麻殖郡」『古語拾遺』に「天富命が日愁命の子孫を率いてこの地方に入植し、麻・楮を植えたので麻殖郡とした」と記されている。江戸時代の正保年間、「川嶋」一時川、河の両方を使つたが、林能勝が川島城番になつて、古代の川に統一した。「少楮里」場所も読み方もわからないが「わかかじのさと」と読むのだろうという。白雉二年（六五一）、全国の戸籍を作り、五〇戸を里とした。その制度を証明する

ことができる。「調」租・庸と並ぶ古代税制の一で、男子に課せられた人頭税で地方の特産物を納めた。  
**「黄絹壹疋」**絶は「悪し絹」で、太い絹糸で織つた粗製の絹織物のこと、下着に使つた。壹疋は布二丈六尺（七、八メートル）である。

「覆物」は、上納する品を包む布で、納付者の住所・氏名・品名・数量・年月日等を記した。

このことから、わが川島町は、天平四年（七三二）以前に村落が形成され、朝廷の支配下にあつたことが証明される。



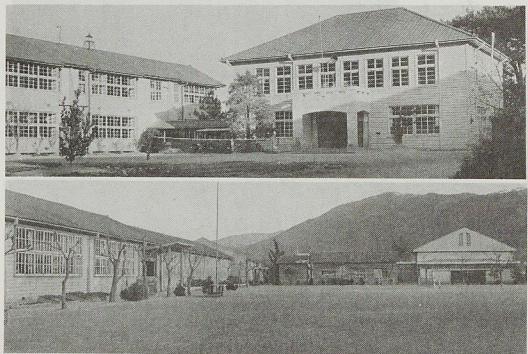
忌部為麻呂戸調の黄絹の覆物

場のある所に移転した。昭和二十八年五月、鳥獸保護の功績により農林大臣賞を受彰した外、科学研究では、度々徳島県代表に選ばれ、知事賞や日本学生科学賞の読売新聞社賞などを受けた。また、野球やソフトボールでも、県優勝を果すなど、研究や運動でうるわしい伝統を築いてきた。

この二中学校は、創立以来十九年、それぞれ輝やかしい校風と伝統を残したが、学校統合のため廃校となつた。

新制度の中学校は、昭和二十二年旧川島に川島中学校、旧学島に学島中学校が始めて誕生した。

旧川島中学校は、昭和二十六年九月、町村合併により、川島東中学校と校名を改称した。いろいろ優れた歴史をもつ中でも、運動競技では、郡内や県下で数多くの優勝を果し、輝やかしい伝統を築いてきた。旧学島中学校は、昭和三十年四月川島西中学校と校名を改め、昭和三十一年四月、現三立電機徳島工

上、川島東中学校旧校舎  
下、川島西中学校旧校舎

### 35 川島中学校

現在の川島中学校は、昭和四十年四月、川島東中学校と川島西中学校が統合して発足したが、鉄筋コンクリート二階建校舎と、各種の施設が整えられ、全生徒が現在の位置に移つたのは、昭和四十二年四月のことである。

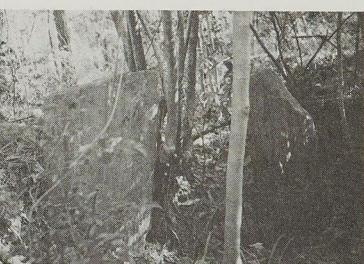
新制度の中学校は、昭和二十二年旧川島に川島中学校、旧学島に学島中学校が始めて誕生した。

旧川島中学校は、昭和二十六年九月、城山の現川島城のある所に移り、昭和三十年四月、町村合併により、川島東中学校と校名を改称した。いろいろ優れた歴史をもつ中でも、運動競技では、郡内や県下で数多くの優勝を果し、輝やかしい伝統を築いてきた。旧学島中学校は、昭和三十年四月川島西中学校と校名を改め、昭和三十一年四月、現三立電機徳島工

川島町内には、前山一帯にいくつかの古墳群があり、現存するものの中で、最も原形をとどめているものに鳶が巣古墳がある。この一号二号と名づけられたものは、ほとんど原形のままでしかも一号古墳のごときは、標高二六〇メートル付近にあって県内では最も高い位置にある。鳶が巣古墳群には、それから下のパイロット道路の上に崩壊したもの三基が確認されている。峰八古墳群もパイロット道路の下方にあるが、ほとんど崩壊しており石柱等によつて四・五基の所在が確認される程度になつて



鳶が巣古墳



峰八古墳

ドーム式天井をもつ忌部山古墳とよく似ている。玄室は隅丸胴張りプラン、圓墳で緑色片岩を用い、存在したものと推定される。その他にも、山田の大塚や近久の古墳群などが町内の各所に存在していた。これらは五世紀後半から六・七世紀にかけて築かれたもので、形も小さく、副葬品も装飾品よりは生活用品が多く出土している。これらの古墳は、千幾百年の歳月の中で風化し、また盜掘にあい崩壊を早めたが、貴重な文化財として永く残しておきたいものである。

- 44 -

## 37 高越神社

昔の人にとっては、火災が一たん発生すると、人力では防ぎえないので、その無力をかこち自然の災害とみてきたものである。

秋葉神社は、火難除けの神として各地にまつられ、その本社は、静岡県周智郡春野町に鎮座されているが、創建は明らかでない。祭神は火之迦具土之大神、戦国時代の加納坊という山伏が再興、永禄十二年（一五六九）、徳川家康から朱印領四十五石を与えられ、鎮火、防火の神として広く各地に秋葉信仰が広まつた。

近久の高越神社は、もと秋葉神社といわれ火難除けの神社としてまつられていた。この境内には巨大な榎があり、明治初年の洪水によって、この榎の下に小祠が流れついたので、氏子の人達は喜んでこれ



高越神社

を合祀し、明治八年（一八七五）社殿を建立した。その後高越神社の分靈を勧請して高越神社と改称、昭和十五年二月境内を拡張し、社殿を改築して現在にいたっている。この社殿の、のき瓦（鎧瓦）に高マテクがしるされており、当時の氏子達の再建に対するなみなみならぬ熱意をうかがうことができる。また玉垣は昭和五十四年十月に建設され、にぎやかに竣工式が行なわれた。

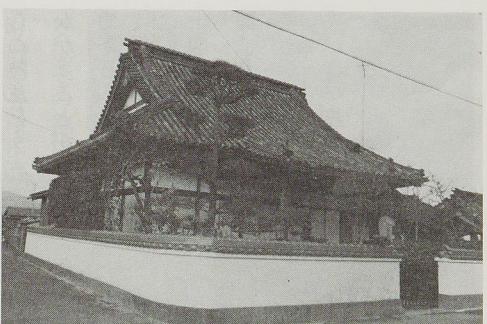
- 45 -

諸行無常の世のさだめは、信仰の対象である寺院・庵堂といえども、信仰 자체が人間の當みである以上、その榮枯盛衰はまぬかることはできない。私たちの郷土川島でも、廃寺庵庵となつて、その跡さえわからぬものもある。

半面、僧侶の個人的布教熱心により、寺院を創立した例も少くない。勝法寺がそれである。

淨土真宗仏光寺派の脇川順誓師は、徹智と慈愛をもつて、献心的に布教にあたり、とくに日清・日露の両戦役の英靈の供養に心をくだかれた。そして、ついに大正五年、学字近久の現在地の北西三十メートルの所に、布教場を建てられた。ここを中心にして、ついに信徒が増していった。

その後、畠一〇五平方メートルを、藤川藤平氏よ



瑞光山勝法寺

り寄進され、昭和四十年、そこへ本堂を建立するに至った。それを機会に、山号を瑞光山寺号を勝法寺とすることを本山から許可され、同四十二年、順誓師の子息脇川淨觀師によつて開基された。

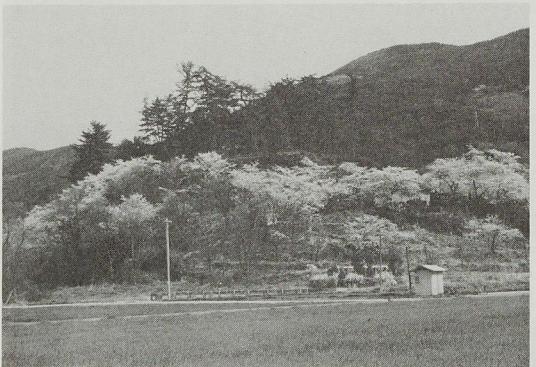
本尊の阿弥陀如来は、北海道の信徒月岡米蔵氏の寄進による。江戸時代の作といわれ、全体的にすつきりした姿である。

境内は、こじんまりとして、親しみを感じさせ、訪れる人も多い。

### 39 二つ森公園

とが行われる。

森の西側と東北の斜面には靈園があり、ここは近在の人々の祖先の靈が安らかに眠つてゐる。このように、二つ森は氏神様の森であると同時に祖先の靈所であり、公園と史跡を持つ風光明媚の場所でもある。近年ここ二つの森になつてゐる。南側に吉本神社（妙見社）と北側に春日神社がある。公園を上ると西は山川町から北は阿讚山脈、東は岩の鼻まで見渡せ、また、吉野川の河跡池である森池は、桑村川の源流となつてゐる。すぐ西側に子どもたちの遊び場があり、その上側には工藤伊賀守形見の碑がある。遊歩道の西側には多くの桜が植えられ、花の時期には、花見客でにぎわい、夜桜も美しい。春秋二回、保勝会の人達によつて下草刈が行われ、老人会の人々の清掃作業も続けられている。そして、両神社の境内には地神碑があり、地神祭の日には当屋によつてまつりごえている。



春の二ツ森公園

明治八年、児島村に前身の治化小学校に代つて公立児島小学校が創立した。同十二年、学村・児島村三ツ島村の合併戸長役場がつくられた際、校舎を辻に移し、公立学村小学校と改称した。さらに、同二十二年、三村が合併、学島村が誕生して校名を学島

小学校と改称、現小学校の基礎が確立した。

明治二十七年郡立麻植高等小学校の廃止に伴い、高等科を併設して学島尋常高等小学校となる。昭和十六年、国民学校と改称、同二十二年、新学制の六三・三制が施行されるに伴い、高等科が中学校として独立、現在の小学校となつた。

校舎は、明治三十五年現在地に新校舎が落成して移転、昭和四十八年鉄筋コンクリートの新校舎が竣工した。校地は総面積一万三千m<sup>2</sup>、運動場六六二三

m<sup>2</sup>、体育館

は六〇〇m<sup>2</sup>  
である。児

童数は、昭和五十九年  
度現在一年

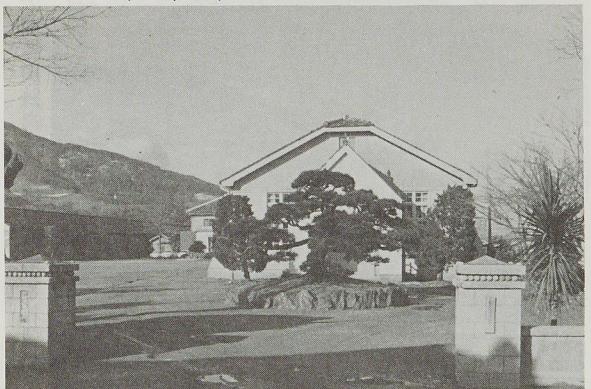
四四名、二  
年三四名、

三年五〇名、  
四年四六名、

五年五四名、  
六年三九名

で、総計二  
六九名で、先生は、校長以下一七名である。卒業生

は、明治時代八九四名、大正時代九一七名、国民学校六六三名、新制小学校四二〇二名、昭和五十八年度末総計六六七六名である。

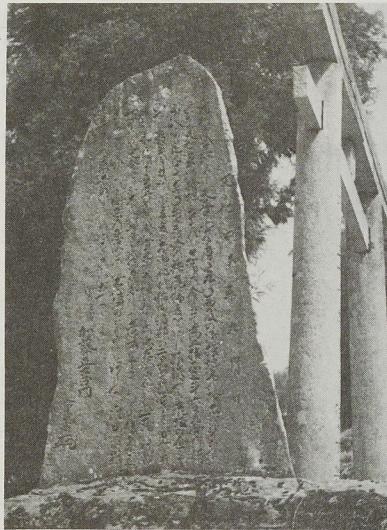


学島小学校旧校舎

のやうなものであつた。峰八部落の人達にとつて、それは大変な労力と根気と共同一致の精神を必要とする大事業であつた。その時の事情を碑に刻んだのが、この猪垣の碑である。その後約一百年の歳月を経て、石垣はいつの間にか崩れたり、石を他に利用されてしまふ姿を消し、時代の流れとともに忘れられようとしている。そして猪垣の碑だけが静かに昔の農民の苦しみを物語ついている。

#### 41 猪垣の碑

国鉄学駅の南方、山の中腹に峰八の民家が点在する。部落の中ほどに山神社があり、その境内に大きな「猪垣の碑」が建つてゐる。今でこそ二次・三次産業に従事している人が多いが昔は農業だけで生計をたてていた人達がほとんどであつた。平坦部では吉野川の洪水にあうと作物が全滅することもあり、山地の農業が安全な利点もあつた。しかし山地には動物がおり、猪や鹿や兔が毎年出没して丹精こめた作物を荒らし、年貢の支払にも困る程であつた。そこで、峰八の人達は、世話を作り、藩に願い出て税を免除してもらひ、その費用と村の人達の労力で、畑の周囲に動物が入れないように石垣を積んだり、灌木を育てて、四キロメートルにも及ぶ県下最大の規模を持つ猪垣を造つた。これは小型の万里の長城



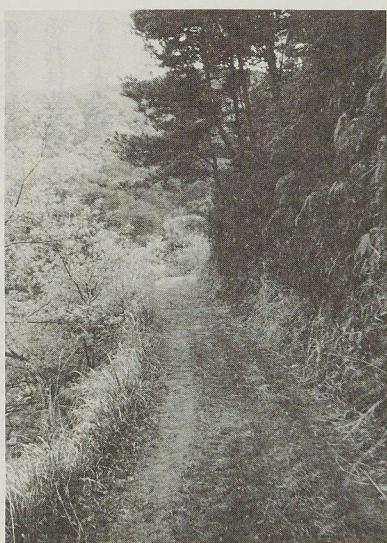
猪垣の碑

## 42 古い道・新しい道

大昔の人々は、けもの道やふみわけ道をたどつて、えものを迫つて生活した。峠や村境には魔物が住むと信じ、そこに花折りさんやおふなたはんを祀つた。遠方へ行き来するようになると、山頂道路が通じ、峠越えをした。後には山裾に伝馬道が開け、今でも前山の各所で、それらの跡を見る事ができる。

藩制初めの慶長年間には、徳島城下から伊予境に至る伊予街道が整備され、神後と三ツ島には道の両側に一里松が植えられて、旅人の目安になつた。明治になつて閑所が廃止されて通行が自由になり、産業も発達して、人や物の移動が盛んになり、道には馬車や人力車がひんぱんに往来した。明治三十三年徳島・舟戸間に鉄道が開通し、昭和初年には自転車が普及。川島を起点に定期バスも運行して、遠距

離の通勤・通学も可能になった。昭和三十年代になると、経済の高度成長に伴ない、新しい国道一九二号線や県・町村道・農免道路の整備も進んだ。南北交通の障害であった吉野川に潜水橋や阿波麻植大橋がかけられ、県道川島寄井線も拡張舗装されて、美郷村や神山町に連絡し、どの道にも自動車が往来して交通は便利になった。しかし、交通事故も跡を絶たず、交通戦争の言葉さえ生まれるようになつた。



古い道（山田）

## 43 麻植郡立農蚕学校跡

明治三十三年、郡立蚕業伝習所が城山に設置せられ、同四十一年、郡立蚕業学校と改称し、同年学字辻に新校舎を建築移転した。化学染料の発明によつて藍作が没落し、これに代つて養蚕業が盛んになり、繭の集出荷や製糸が発達してきた。そこで、蚕業技術者の養成を目的とともに、別科を設けて製糸技術の普及を図つた。

大正四年、修業年限三年の郡立農蚕学校と改称し、卒業生約七百名の人材を送り出し、農蚕業の振興に寄与してきたが、大正七年、廃校になったことは惜しまれる。

本校の木造二階建の講堂は、当時としては堂々とした洋風建築の立派なものであつた。佐竹氏が買受け病院を開設していたが、昭和十三年閉鎖された。



麻植郡立農蚕学校（麻植郡制誌より）

その後、十川安三郎氏が跡地を購入、現当主十川重雄氏の所有となつていい。町道からの入口には、今も郡立農蚕学校の御影石の大きな門柱が残つており、その付近は当時の面影の一部をとどめている。

学のぶどう園は、県内で屈指の観光ぶどう園として有名である。これは戦後の荒廃から立ち直った農家が、研究会を作り、各種の特産物の研究を重ねて、いくうちに、ぶどう栽培の専門的研究によつて成功したものである。

少数篤農家の努力が実つて生産を始めたころ、ある農家が、知り合いの婦人会の人達を好意的に、園に入れたことがきっかけで、昭和三十六年、県下にさきがけて観光ぶどうに取り組むようになった。

生産者から消費者へ直結し、好きなだけ食べて、土産を提げて帰る。この近代的システムは、レジャーを楽しむ現代人の好みにうけて、開園のシーズンには、家族連れや、友達同士のグループや、職場の団体客などでにぎわいを見せてている。

#### 45 瑞璃山薬師寺

瑞璃山薬師寺は真言宗御室派に所属している。寺

伝によると、もとは南勝寺と称し、寛永元年（一六二四）僧快敬が中興し、場所も今の寺の上方竹藪のあたりにあつた。その後宝暦年間現在地に建立し、薬師寺と改めたといわれる。天正のころ、土佐の長宗我部軍が阿波に侵入して、この寺を攻めた時、本尊薬師如来が蜂の大軍に化身して寄せ手に襲いかかり、そのため兵火をまぬがれたという伝説がある。

本尊は、阿弥陀如来像の形態であるが、寺では薬師如来と称している。両手を來迎印に結んだ印相は阿弥陀如来像であるが、両手首の先は後補であり、当初は左手に薬壺を持ち、右手は施無畏の印を結ぶ薬師如来本来の姿であつたであろうから、薬師如来と称してもふしきではない。像高五十二センチメー



瑞璃山薬師寺

瑞璃山薬師寺  
瑞璃山薬師寺は真言宗御室派に所属している。寺伝によると、もとは南勝寺と称し、寛永元年（一六二四）僧快敬が中興し、場所も今の寺の上方竹藪のあたりにあつた。その後宝暦年間現在地に建立し、薬師寺と改めたといわれる。天正のころ、土佐の長宗我部軍が阿波に侵入して、この寺を攻めた時、本尊薬師如来が蜂の大軍に化身して寄せ手に襲いかかり、そのため兵火をまぬがれたという伝説がある。

本尊は、阿弥陀如来像の形態であるが、寺では薬師如来と称している。両手を來迎印に結んだ印相は阿弥陀如来像であるが、両手首の先は後補であり、当初は左手に薬壺を持ち、右手は施無畏の印を結ぶ薬師如来本来の姿であつたであろうから、薬師如来と称してもふしきではない。像高五十二センチメー



楽しいぶどう狩り風景

しかし、この背景には、組合の運営や県内外の宣伝、生産技術の研究、特に種なしぶどうの改良とその品質向上など、多くの苦労と年月の積み重ねがあった。また駐車場の確保や園内水道の配管、ぶどうセンターの建設など、色々な設備の充実に努めている。現在の組合員数三十三戸、栽培面積は約六ヘクタールであり、今後長く、評判の良い観光ぶどう園として伸びてゆくことが期待される。

八幡神社の祭神は、ふつう応神天皇（誉田別命）、比売大神・神功皇后の三神であるか、このほかに仲哀天皇、仁德天皇を併祀するところもある。応神天皇と神功皇后は、大陸文化をわが国にとり入れ、文化興隆をはかられた。

八幡信仰の本源は九州の宇佐神宮で、奈良朝のころから皇室の厚い信仰があつた。八幡の神は、全国八万の神社のうち二万五千社を数えるが、県下でも神社の三分の一が、八幡神社である。町内には三社鎮座されているが、ここでは児島の八幡神社について説明する。

この社はもと式内小社で秘羽女神社と称し、宇和女に鎮座していたが、天正年間兵火にかかるて、神宝、社記等をすべて焼失したので、その創立年代

は未詳である。

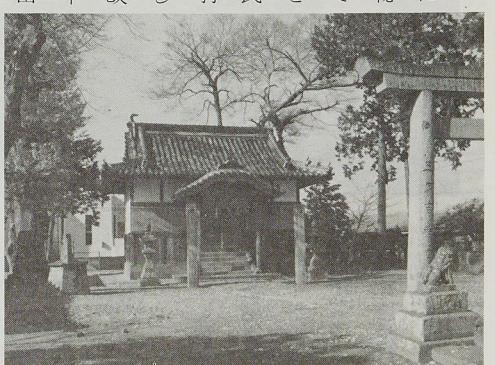
その後現在地に勅請し、式内秘

羽女神社として崇敬していたと

ころ、蜂須賀氏入國の後、秘羽

女の社号はさしつかえあり、改

称すべき旨を申し渡され、誉田別命を合祀して以来、鎮守八幡神社と称し今日に至つている。



児島の八幡神社

社地の西南二〇〇メートルには、秘羽女塚がある。また字宇近久にも、八幡神社があり、この社は氏子達の熱意によつて修築が進みつつあり、境内の桜の満開は美しい。

まつて語り明かす庚申講も広く行なわれた。今でも「今夜庚申米団子」とか、「話は庚申さんの晩に」の言葉が残つている。また、耳の悪い人や、いぼのある人が、庚申さんに祈願して、松かさや白石を供える習慣があり、北向きの庚申さんは靈験があらたかであるとか、七庚申を巡拝すると、中風にならないなどの俗信がある。

#### 47 庚申さん

町内のいたる所に、多くの手（四本か六本）に弓、矢、矛などの武器を持ち、恐ろしい形相で立つてゐる石仏や、「庚申待一座二世安樂」「猿田彦」などの文字を彫つた石碑がある。これは庚申塔である。

昔、中国では、人の体内に三戸（ミズナ）という虫がすみ、庚申の夜、人が寝静まるのを待つて天上に昇り、その人の悪行を天帝に告げて、寿命を縮めると信じ、この夜は寝ずに起きてゐる風習があつた。奈良時代これが日本にも伝わり、仏教と合わさつて青面金剛を庚申として崇め、武士の間でも庚申塔を建てることが流行し、町内にも約六〇基の庚申塔がある。庚申の夜は、一晩中慎んで過したり、庚申堂に集



庚申さん（学島小学校前）

善勝寺は、学字王子にあり、浄土真宗伝光寺派に属し、山号を紫雲山という。

本尊の阿弥陀如来像は、室町時代の作である。ほかに、天水塞姫の神像といわれる珍しい婦人像や聖観音坐像が安置されている。

この寺の始りは、中世にさかのぼる。そのころ阿波国を支配していた勝瑞城主細川讚岐守持隆の孫右近大夫持方は、家老工藤伊賀守の勧めによつて、石山本願寺彰如上人の弟子となつて釈了正の号を賜り、上人より持領の即身仏を本尊として、三ツ島柳の坊に寺院を建立し、善勝寺と号した。約四百年前である。その後、宝永四年（一七〇七）、吉野川の大洪水で流失したとき、廃寺となつていた悲大寺跡へ移つた。現在の善勝寺は、千百坪の敷地内に、本堂・書院・庫裡などが



紫雲山善勝寺

院・庫裡などが  
ある。納骨堂には、信徒のほか  
身の戦死者の靈が手厚く葬られて  
いる。近くの山に溶けこむよ  
うな静かな庭園は、広く、現住職細川勝司師に

より丹精こめて手入れされ、みごとである。書院の前にはみごとな枯山水がある。門前の樁は、昔天皇が巡幸されたとき、枝を突きさされたまま立ちさられたのが、芽を出し枝を張つて大木になつたと伝えられている。

#### 49 王子神社・西出目八幡神社

王子神社の祭神は、宇菟之若郎子皇子で、もと王子権現といわれた。明暦二年（一六五六）の棟札には、「奉再建王子大権現御殿成就」と記し、「寛保御改神社帳」に「学村王子権現神主西麻植村右門」とある。なお安永六年（一七七七）天明七年（一七八七）

など数枚の棟札を所蔵している。明治三年王子神社と改称、同八年村社に列した。王子神とは、王子の姿で現われた神の意である。神道では、神は老人あるいは童子の姿をもつて現わるとの信仰がある。代表例は八幡神

で、神功皇后と八幡神とは母子神とも考えられた。

なお、八幡神社は王子神社と相接して鎮座されている。この神社には、古くからの神事として、湯神樂が行なわれている。毎年一月八日・九日御日待の行事の後、引続いて



湯神樂の神事（西出目八幡神社）

早朝拝殿の前方に四本の忌竹を立て、しめ縄を張りめぐらした中に築いたかまどで湯を沸かし、大祓を奏上げながら、榦の葉を一枚ずつちぎつてかまにいれる。しながら、榦の葉を一枚ずつちぎつてかまにいれる。湯がわき立つと氏子数に応じた竹筒を湯に浸して参列の氏子に振りかけ、その罪けがれを払い清め、一年中の厄病を除く。その後四本の御幣を立てた竹筒に、わいた湯を入れ、神前に供え、祝詞を奏上して、湯神樂の神事が終る。

住吉神社の祭神は、底筒男命、中筒男命、表筒男命の三神で、これを総称して「墨江の神」とも「住吉の神」ともいう。その昔、伊邪那岐神が筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で禊をした折に生れた神である。のちに神功皇后の外征を助け、凱旋の帰路神託により、福岡・山口・大阪にまつられたと伝えている。

航海、武勇の神として崇められ、とくに大阪の住吉大社は朝廷から特別な尊崇をうけ、一般の信仰が厚く、その分社が全国に約二千社ある。

三ツ島の住吉神社は、その一社にあたる。この社の創立年代は、詳らかでないが、『阿波志』には「住吉祠三島に在り」と記され、寛保御改神社帳には、「三ツ島村住吉大明神、社人同村伊大夫」と、ある。



その拝殿の唐破風には細川氏の定紋が彫刻され、また社殿裏に細川義吉のものと伝えとなどから、細川氏ゆかりの社とも思われる。

境内には、安永

二年（一七七三）の大鳥居、天保七年（一八三六）の大灯籠が奉納されている。このことから、藍産業の盛んな時に、藍商人や氏子たちが、積荷の安全と家運繁榮を祈願して奉納されたものと思われる。明治八年、村社となる。

## 51 八葉山蓮光寺

蓮光寺は、三ツ島にあり、山号を八葉山といい、浄土真宗西本願寺派に属する。開基は、天正年間といわれ、初代住職了誓師から、現在十三世の教誓師に継承されている。

本尊は、阿弥陀如来立像で、他の浄土真宗寺院の本尊と同じく来迎印を結ぶ姿で、高さは、三五センチ、木造、一本造り、内剃り、玉眼（水晶）である。光背は、龕後光の頭光を持つ。大粒の螺旋髮、古様の顔などから室町時代の作でなかろうかと思われる。また、右の本尊の他に、中央に阿弥陀如来像、左右の脇士に觀音、勢至の両菩薩像を配した高さ十四センチ、浮彫りの小さい三尊像を安置しており、その材質が竹製であることも珍しい。なお、この仏像は、徳島藩主から寄進されたことが、寺に所蔵する古文書で明らかにされている。



八葉山蓮光寺

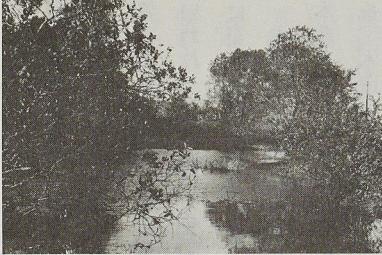
また、寺には、七高祖御影と題する画幅がある。

（七高祖とは、浄土真宗で浄土教を相承した印度の龍樹、天親、中国の曇鸞・道綽・善導、我国の源信源空をいう。）この画像は、絹本着色で、たて一〇三・三センチ、よこ四九七センチ、金箱、金泥などを多く用いた作品で、収納箱書からみて、宝暦十一年（一七六一）以前の作である。

吉野川は、古来四国三郎と呼ばれ、荒れ川のひとつと数えられ、本流や分流が何線もある。昔は、堤防や護岸工事などが十分に行われていなかつたので、洪水により、たびたび流路が変つた。

地質時代の吉野川は、一時期川島町附近では、その流路がいくつもあつて、その一つは南側の山麓を通り、山川町忌部の岩戸付近で、顕穴(おほあな)をつくり、その岩戸池を経て東へ流れ二ツ森の麓の森池に至る。さらにかずら池、浦の池、堀池、石橋池、アクラ池を経て瓢箪池、丸池、

久保田のウマタテ池から旧天野病院北側を流れ、東公民館西側を通り現在の吉野川へ達した。また、天神から久保田の蓮池を経て現在の桑村川付近へ流れた線、今ひとつは、山川町境付近から三ツ島の学島川付近の低地を東へ前池、長池、中須池、オチヨウマエ池を経て川島合同庁舎の西側を通り吉野川へ流れた。これらの川跡は、洪水のたびに合流したり分流して、川幅や流路などがしばしば変り、前述した河跡の池をいくつもつくるに至つた。しかし、吉野川改修後の今日では、その大部分が、そのまま残つてゐるものもあるが、埋め立てられて農地や宅地に変り、その一部がわずかに昔の面影をとどめるにすぎない。



森池 (二ツ森下)



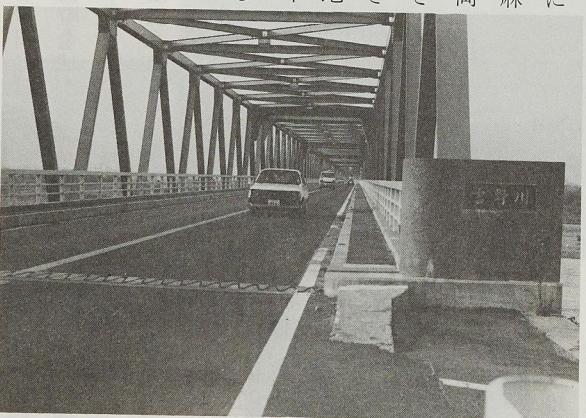
石橋池 (長楽寺北方)

### 53 潜水橋と阿波麻植大橋

川島町と市場町は、吉野川を挟んでたがいに相対している。かつては、渡し船がこれを結び、栗島渡し、川島渡し、児島渡しの三つの渡しがあつた。中でも、川島の渡し場は、浜といい、吉野川を上下する川船の船着場でもあつた。

昭和十年には、この浜から善入寺島へ太い鉄線を張り、岡田式の渡しとし、人はもちろん、家畜や農作物を運んだ。さらに、同三十七年には、ここに潜水橋がかけられ、今日に至っている。児島渡しは、昭和四年、貨取りの木橋がかけられたが、同三十年、コンクリートの潜水橋に代り、今日に至っている。阿波麻植大橋は、三ツ島から吉野川をまたいで、市場町の香美に至る全長一〇八四尺、幅八尺の大橋である。昭和四十六年着工、同五十六年完成したが、

なつた。



阿波麻植大橋

総工費は二十八億八千万円で、両側に歩道があり、水銀灯六十二基を備えた近代的な橋である。

吉野川にかかる橋としては、十七番目の橋で、徳島市の吉野川大橋に次ぐ、県下第二の長大橋である。この架橋によつて、麻植、阿波両郡が直結されたが、さらに主要地方道津田川島線を通じて香川県の津田町とも完全に結ばれることになつた。

善入寺島は、吉野川の真中にある中州で、その面積はおよそ五〇〇ヘクタールに及ぶ。現在、耕地は三五〇ヘクタールで、本町や市場町など、九〇〇余人が占用し、その耕作に当たっている。土壤は、吉野川が運んできた沃土で、サツマイモやスイカ・ゴボウ・馬鈴薯・大根などの栽培に適し、近年は水稻も栽培されて、本町の重要な農業生産地になつてゐる。

ここには、もと宮の島村や栗島村など、いくつかの村があり、人家が五〇〇戸、三千余の人が住んでいた。当時は、学校が二校あり、浮島八幡宮などの神社もあった。毎年の例祭には、近郷から多数の屋台が集り、御輿<sup>みこし</sup>が吉野川を渡御するなど、非常にぎやかであつた。



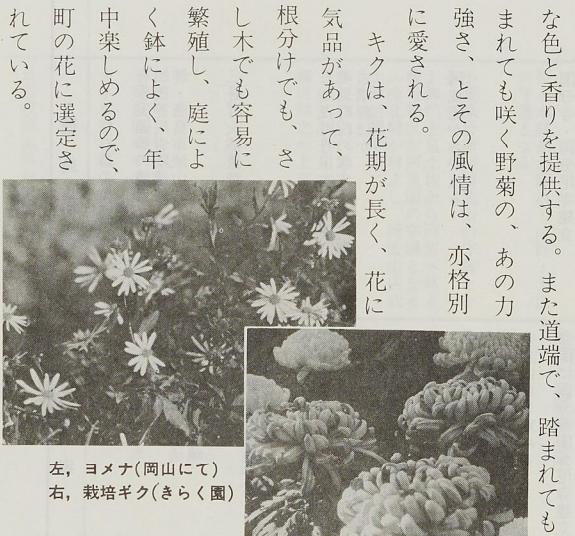
左、城山のイロハカエデ  
右、ナンゴクミネカエデ  
(剣山)

### 町の木 カエデ

カエデは、秋紅葉が美しいので、古く万葉の時代から広く賞讃されている。あの澄みきつた秋空に映えるその色と姿は、何ともいえぬ風情がある。

町内はもちろん、県内には自生が多く、イロハカエデやオオモミジは、特に紅葉が美しく、到る所に名所をつくる。

カエデは、栽培が容易で、庭園樹としてもよく楽しめるので、町の木に選定されている。



左、ヨメナ(岡山にて)  
右、栽培ギク(きらく園)

### 町の花 キク

キクは、山野に自生が多く、春夏秋冬、野趣豊かな色と香りを提供する。また道端で、踏まれても踏まれても咲く野菊の、あの方力強さ、とその風情は、亦格別に愛される。

キクは、花期が長く、花に氣品があつて、根分けでも、さし木でも容易に繁殖し、庭によく鉢によく、年中楽しるので、町の花に選定されている。



善入寺島全景 (峰八より撮影)

そこで住民は、長く住みなれたふるさとに心を引かれながらも、大正四年善入寺島から移転、全員が立のきを終つた。現在、城山には移転の碑がある。

当時、吉野川には堤防がなかつたので、洪水の時には、川島町全域がしばしば水びたしになつた。明治四十二年、吉野川の改修工事を行うことになり、善入寺島は洪水の際の遊水地とすることになった。

川島町歴史年表





## あとがき

この「ふるさと川島」は、町文化財保護審議会委員の方々に原稿執筆をお願いし、山田地区から順番に、道ばたの古い石像や、碑文、神社やお寺の建物等の文化財を、写真を通して町民に広く理解していただくため編集しました。

各委員より提出された原稿は、検討をかさね、加除修正を加え、一頁ごとにまとめました。

川島町は文化の町であり、文化遺産もたくさんありますが、紙面の制約上、全部書き尽くすことは不可能でした。また、資料の不足に加えて編集を急いだため、将来の研究にゆだねる部分もあると思います。しかし、このささやかな書物がきっかけとなって、ふるさと川島町の見直しと、町を愛する豊かな心が芽生え、有形無形の文化財の保護について、更に努力していただけようお願い申し上げます。

川島町教育委員会教育長 山口晋

## 編集委員

委員長  
委員員

入長竹木喜鎌阿  
交野内野多田部  
泰徳久成近  
助治潔夫弘之一

(アイウエオ順)

## ふるさと川島

発行日 昭和59年3月31日

発行 川島町・川島町教育委員会

編集 ふるさと川島編集委員会

印刷 教育出版センター

徳島市佐古三番町8-14

T E L (0886)22-1201

**貸出期間票**

下記の日までにお返しください



川島町・川島町教育委員会